

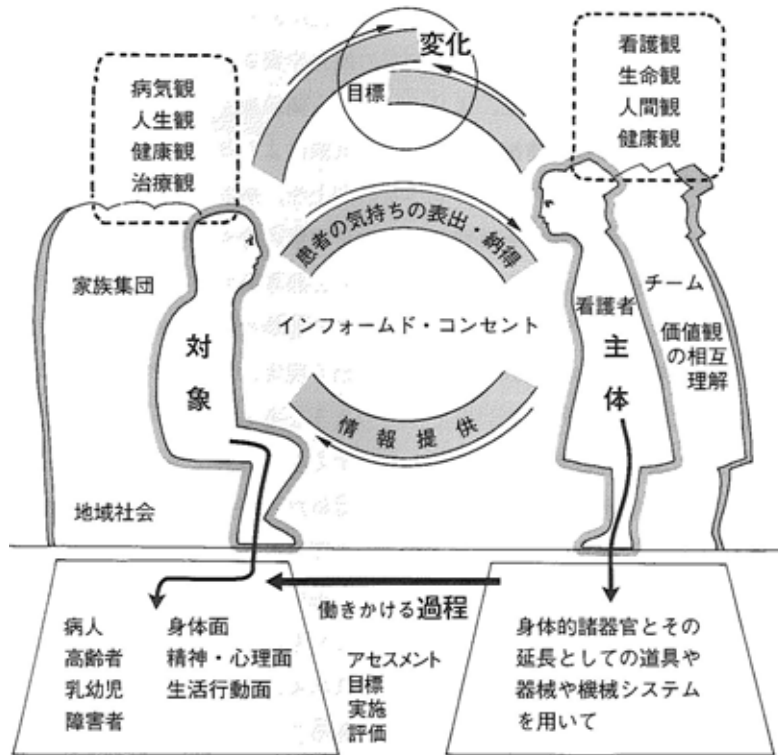
人間の本质を考える - 労働・知性

10.11.26

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

はじめに：「ものさし」の大切さ



『新訂 看護観察と判断』
(川島みどり、看護の科学社)より

図1 看護実践の構造

一。自然・人間・社会への「ものの見方・考え方」(世界観)

1. 対象（子どもや保護者）や、自分や社会をどう見るのか
世界観とは？

- * 自然や人間や社会に対するなんらかの「ものの見方・考え方」のこと
- * 誰でもなんらかの世界観をもっている
- * 世界観をより区分けすると、自然観、生命観、人間観、社会観、人生観など…。

「観」によって、行動や実践が変わってくる。

2. 必要なのは、首尾一貫した世界観

対象が変わったら、世界観も変わる????

- * たたとえば「子ども観」・・・変化・成長する、発達可能性、原因と結果を考える
- * でも「社会観」は?・・・「どうせ変わらない」「よくわからない」

あれれ、首尾一貫してない(こういう人がけっこう多い)。

人間と環境の関係は…。

* 環境は人間に影響をあたえる。

* 人間は、環境を整え、変えることができる（目的意識的に）。



二。人間の本質 - 労働、そして知性について

1。「労働」が、人間らしさを育てた

人が、道具を使い、目的をもって自然に働きかけ、環境を整えたり変えたりする。

それが、「労働」。

* 人間は、労働なしには、生きていけません。「たまたま」「一時的に」労働するのではなく、「つねに、もっぱら」労働をして、自らの生存を保ち、社会を成立させている。私たちの身のまわりのものも、すべて労働によって得られている。

* だから、「労働」というものを、理解することが、人間を理解することにつながる。

労働の起源は、人類の起源と同じでありまして…

* ヒトは、猿から分かれて、2本足で立つように。

* 「自由になった前足」が、「手」となる。

* 人間の手は、“つかむ”“なげる”“ぶつける”“ひっぱる”“むしる”など、多面的に活用された。人間の手は、とても複雑な動きが可能で、繊細にできている。

* そして、決定的なのは、道具の使用を行うことが可能になったということ。

道具の使用

* 自然とのきびしい“素手でのたたかい”の中で、腕より長いものを、にぎりこぶしよりも硬いものを、つめよりもするどい武器を自然のなかに探し求め、腕のかわりに木の枝、にぎりこぶしのかわりに石のかけらを手にするようになる。自分の体の延長として。

* 道具の特徴は、だんだん改良することができること。子孫に伝えられ、1代、また1代と、道具に改良が加えられ、種類もしたいに多くなっていく。道具の改良は、人間の自然に対する力をより大きくしていく。

* 手によって何度も道具をつくり、使っているうちに、手はだんだんと器用さを身につけていった。道具の製作・使用という労働が、手を精巧なものにしていった。

* また脊椎動物は「顔」が進行方向の最先端に位置します。そこに、目、鼻、耳、舌、ヒゲなどの重要な感覚器官（外界の探索機能）がある。人間は2足歩行の結果、外部の探索行動における「手」の役割が大きくなった。

* 「道具の使用」「外部探索」の結果、手の神経が発達し、それが脳の発達をうながすという関係になる。その脳の発達で、複雑な指令を手を送るように。手の発達と脳の発達は、このように一体にしてすすんでいった。

* テレビを組み立て、パソコンのキーをたたき、字をさらさらと書き、ピアノをひきこなす手、そんな手を人類が最初からもっていたわけではない。今日の人間の手は、何百万年という人間の労働の成果がつくりだした。

2. 知性の獲得—ひらたく言えば、「考える力がある」ということ

人間だけが、考えることができる

- * 人間の知性は、感覚器官をとおして知覚した対象を記憶し、これをもとに想像し、また言語によって一般化し、抽象化してとらえる働き。脳の働き。
- * 知性と、感情と、意志は、相互に深くかかわりあっていて、それらが総体として、私たちの生きていく力をつくりだしている。
- * 知性・感情・意志をつかさどるのは、「言葉」。言葉なしには考えることができない。判断・推測・比較・分析・総合・推理、想像…などの「考える力」は、すべて言語によって支えられている。
- * 豊かなことばを獲得できると、豊かにものごとを考えるベースになる。

そもそも、なぜ人間は「言葉」を獲得したのか

- * 集団労働のなかでのコミュニケーション
 - ・ 合図、指示、意思統一
- * 道具を使って火の活用。肉食の獲得（口腔の広がり、脳のエネルギー源）
- * 言葉の発達 - 「有節音」が獲得される。
- * やがて文字の発明（経験・技術・文化の世代をこえた蓄積）



考えることができるから、失敗もする

- * 考えることは、誤りや失敗も引き起こす。
- * でも、その失敗から、人間は「考える」ことで学ぶことができる。だから成長できる。

「ゆらぐことのできる力」をもつのは人間だけ

- * 自分はいまのままでいいのだろうか？
- * あのときの、あの実践は、ほんとうにあれで良かったのだろうか？
- * 「ゆらぐ」ことは、次のよりよい実践・成長へのステップとなる

3. 労働から芸術や文化も生まれてきた

労働する過程で

- * 道具をつくる過程で、その苦勞のなかで、自分のつくる道具 = 作品のでき具合に心が動くようになりました。さまざまな道具の製作をくり返すなかで、「もの」の「かたち」がうまくできあがったとき、心がはずみ「ああ、美しいな」という美的感情のようなものが芽生えました。こうした心の動きを、「理性」と区別して「感性」や「感情」といいます。
- * また、ときには労働の必要から、「図」や「絵」を描き、意思統一をしました。そのうち、その「図」がやがて見事な「作品」となり、美的感情もますます磨かれ、同時にその「図」を描く仕事に専念する人間、つまり「芸術家」を育てました。



- * やがて、舞踊や音楽、彫刻や絵画、さまざまなジャンルの芸術が分化発展し、一方でそれを鑑賞し、そこから生きる力を得る「鑑賞者」も育っていきました。
- * 考える力や科学と、感性・感情・芸術文化を一体として「人間の生きる力」として豊かに発展させてきたのが、人間の歴史であり、労働の歴史でもあった。

労働は、本来人間にとって、「喜び」なはず。

- * ものを生み出す、創造する、形にする、むすびつける、人の役に立つ
- * 「労働」をつうじての仲間とのつながりは、独特な連帯感を生み出す



「労働のあり方」は、「社会のあり方」と結びついている

- * 21世紀の日本の資本主義社会は、どんなありようをしているのか？

4. 社会を支えているのは、無数の労働 - しかし、「働く人びと」の状況はどうか？ なぜ蛇口をひねると「水」が出る？

無数の人びとの労働によって支えられて

- * 『いっぽんの鉛筆のむこうに』（谷川俊太郎文ほか、福音館書店）

「自分たちの地球が宇宙の中心だという考えにかじりついていた間、人類には宇宙の本当のことがわからなかったと同様に、自分ばかりを中心にして、物事を判断してゆくと、世の中の本当のことも、ついに知ることが出来ないでしまう。大きな真理は、そういう人の眼には、決してうつらないのだ」

（吉野源三郎『君たちはどう生きるか』岩波文庫）

「私」の生活を支えている人びとのことを想像する

- * 生活はどうか？ 働き方はどうか？ その人の労働は尊ばれているか？

「生み出してくれる人がなかったら、それを味わったり、楽しんだりして消費することは出来やしない。生み出す働きこそ、人間を人間らしくしてくれるのだ。これは、何も食物とか衣服とかいう品物ばかりのことではない。学問の世界だって、芸術の世界だって、生み出してゆく人は、それを受取る人々より、はるかに肝心な人なんだ」（前掲書）

「労力一つをたよりに生きている人たちにとっては、働けなくなるということは、餓死に迫られることではないか。それなのに、残念な結果だが今の世の中では、からだをこわしたら一番こまる人たちが、一番からだをこわしやすい境遇に生きているんだ。粗末な食物、不衛生な住居、それに毎日の仕事だって、翌日まで疲れを残さないようになどと、ぜいたくなことは言っていられない。毎日、毎日、追われるように働きつづけて生きてゆくのだ」（前掲書）

働く人びとが手をつなぐことの意味 - 痛みの共有、あたたかさ、エネルギー！

【さて、今回は・・・】 第2回「人間の豊かさを考える - 社会、文化」